

日常言語情報を利用する国語教育の可能性について

小助川 貞 次

富山大学人文学部紀要第 68 号抜刷

2018年2月

日常言語情報を利用する国語教育の可能性について

小助川 貞 次

本稿では国語科を対象に、日常生活の中に大量に存在する言語情報に注目することで、国語に対する関心が深まるだけでなく、社会の仕組みに対する関心をも喚起できることを述べる。

1. 国語のつまらなさ

教科としての国語の難しさは、文字テキストを読まなければならないということに尽きる。これは「読む」習慣が極度に低下していることが背景にあることは言うまでもない。「今の若い者は」という批判は、どの時代にも当てはまる常套句ではあるが、近年のICT（情報通信技術）の驚異的な発達！は、過去のどの時代にも無かったことである。スマホの画面に配置されるのは、もはや文字やテキストではなく、スタンプだったり動画だったり、そもそも「読む」ことを前提にしていない。それでいて相手とは文字テキスト以上にコミュニケーションの深まりが可能である。

現行の学習指導要領では国語教育の3領域は、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」とされ、「書くこと」と「読むこと」の「目標及び内容」は「物語や、科学的なことについて書いた本や文章を読んで、感想を書くこと。」（小学校第1学年及び第2学年）とされる。「読むこと」に対する基本的な発想が「感想文を書くこと」にある。とするならば、「感想文を書くこと」が「読むこと」を強く拘束することになるのではないかと思われて仕方がない。

例えば毎年行われている「青少年読書感想文全国コンクール」（Web版に拠る）では、開催趣旨に「子どもや若者が本に親しむ機会をつくり、読書の楽しさ、すばらしさを体験させ、読書の習慣化を図る。」「より深く読書し、読書の感動を文章に表現することとおして、豊かな人間性や考える力を育む。更に、自分の考えを正しい日本語で表現する力を養う。」（応募要領）とあり、トップページには「感想文Q&A」のボタンが用意されている。そこでは、読書感想文の意義や本の選び方、感想文の書き方についての簡潔な説明がなされているが、「読書の楽しさ」についての説明はない。

一方、教科書の中の教材は生徒が自分で読みたいと思って選択したものではない。複数の課題図書から選択できる読書感想文よりもさらに窮屈である。しかも学習成果について客観的な評価をしなければならないので、普通の授業では生徒の自由な発想による読解は退けられ、教

員は「正しい読解」に導くための「解説」に終始することになる¹⁾。このような窮屈さは教科書と試験を併用し続ける限り解決されない問題である。

2. Line の言語



図1 Line「なう！」

稿者はかつて、メールの文章についていくつかの事例を挙げて論じたことがあるが（小助川貞次（2006））、近年は業務以外の目的でメールを使うことは激減し、Line や Twitter や Facebook などの SNS に移行したと言えるかもしれない。そこでは、テキストよりも画像、動画、スタンプなど、それまでのメールでは考えられなかった表現手段がごく普通に使われる。特に親しい仲間内で交わされる場合には、仲間内でしか理解できない文脈に依存することが多く、第三者がその内容を理解することは難しい。図1のLine画面には、3つの発話が記録されているが、テキストは「なう！」の3文字だけで残りは写真である。文脈が明示されていないため、どのように読み取るかに正解はない。しかし、読解のキーを関連づけることは可能で、3件の発話者が同一であること、タイムスタンプが同一であること、時計が2時50分を指していること、ソファで座布団のようなものに上半身を埋めている男性が写っている

こと、これらを繋ぎ合わせればこの状況の理解はさほど難しくはない。このような小さな証拠を積み上げて文脈を再構成していく読解方法は、テキストの読解にも応用できる。表1は、夏目漱石「こころ」の冒頭「私」のルビを記載通りに示したものである。東京・大阪朝日新聞での連載初回（1914年4月20日）では「私」に「わたし」のルビ、連載終了直後の1914年9月20日に出版された岩波書店の単行本のルビは「わたくし」、連載開始100年を記念して再連載された朝日新聞（2014年4月20日）では「わたくし」となっている。ちなみに、当用漢字音訓表（1948年2月16日内閣告示）、常用漢字表（1981年10月1日内閣告示）、（改定）常用漢字表（2010年11月30日内閣告示）を見ると表2のようになっていて、「私=わたし」が戦後60年以上経ってようやく市民権を得たように感じられる。なぜ漱石自身は僅か数ヶ月で「わ

たし」から「わたくし」へ変更したのか、この作品における他のルビはどうなっているのかなど、極めて小さな問題から出発して、調べ上げるテーマは山ほどある²⁾。

表1 『こころ』冒頭「私」のルビ比較

媒体	発行時期	ルビ
東京・大阪朝日新聞	1914. 4. 20	わたし
単行本・岩波書店	1914. 9. 20	わたくし
再掲載・朝日新聞	2014. 4. 20	わたくし

表2 「私」の訓

名称	告示時期	訓
当用漢字音訓表	1948. 2. 16	わたくし
常用漢字表	1981. 10. 1	わたくし
常用漢字表	2010. 11. 30	わたくし、わたし

3. 日常生活の中の言語情報

現在の（過去もそうであった）国語教育が、言語スキルの習得とその客観的評価（試験）に執着する限り、「発見の喜び」は伴わない。読書感想文は読者自身の感動の発見に繋がるように見えながら、表現力や書き方といった言語スキルの向上を目指しているように思われて仕方がない。そもそも「感動」を評価することが可能なのかといった議論も当然必要であろう。これに対して、日常生活の中の言語情報（新聞、雑誌、映像、看板、標識、チラシなど）には、「なぜ」と思われることが隠されていて、しかも、その「なぜ」自体に気づかないで見過ごしてしま

うことが多い。ここでは、いくつかの具体例を挙げ、「なぜ」に気づくヒントについて論じようと思う。



図2 朝日新聞 2013年10月20日

(1) 立川の研究所、初公開

朝日新聞 2013年10月20日朝刊（東京多摩版）に図2に示す記事が載った。中国の書体集「古今文字讀」の写本が、東京立川市にある大学共同利用機関法人・人間文化研究機構「国立国語研究所」で一般公開されたという内容の記事である³⁾。この記事を見て「はてな？」と感じた読者はどの程度いたであろうか。立川市はかつ

て在日米軍の基地があった場所で、現在は国の研究機関や教育機関、防災関連施設など、公的な組織・建造物が多く立地する。大学共同利用機関法人・人間文化研究機構では6研究施設の内、国語研究所、国文学研究資料館の2つが、(同)情報・システム研究機構では、5研究施設の内、極地研究所、統計数理研究所、データサイエンス共同利用基盤施設の3つが同じ地域(立川市緑町)に存立している。これら5研究施設の内、国語研究所と極地研究所には「国立」の2文字が被さる。研究者仲間では「国研」とか「国語研」とか呼んでいる(国立教育政策研究所も「国研」と略称されることがある)。問題は、これらの研究施設が立地する立川市の東隣が国立市(クニタチ)で(JR中央線だと一駅)、「国立(クニタチ)」の名称を冠した有名な音楽大学がある(所在地は武蔵村山市と接する立川市柏町)。立川市周辺で「国立」を使えば、まず間違い無く「クニタチ」が連想され、かの音楽大学へ結びつく。新聞記事に戻る。見出し語の「立川の研究所、初公開」は正しい名称で伝えるのであれば、「国立国語研究所、初公開」とすべきであったろう。「国立」の読み「コクリツ」「クニタチ」の混同を避けたことが推測できる。もう一つ問題が残る。そのような混同を避けるのであれば、「国立」を被せずに単に「国語研究所、初公開」でも可能だったはずである。そうしなかったのは、この地域での国語研究所と音楽大学との知名度の問題(Google検索で国立音楽大学:237万件、国立国語研究所:54.2万件、Yahooでも同様)と、「国語研究所」という名称を使う組織(主に塾関係)が他にもいくつか存在するためであろう。

(2) ご利用できる車の大きさ

JR西日本金沢支社が民間に委託して管理する富山駅南口の時間貸駐車場の自動入口ゲートの写真を図3に示す(撮影日:2016年8月17日、撮影者:小助川貞次)。この場所は、旧富山駅の関連施設があった一帯を



図3 富山駅南口臨時駐車場

北陸新幹線開業に合わせて整備した土地である⁴⁾。この写真を見て「はてな?」を感じる人は少ないと思う。少し補足説明をすると、この時間貸駐車場は完全な青空駐車場である。この駐車場の向かい側(入口ゲートの反対側)が新幹線の高架下で、ここにも同じ時間貸駐車場があるが駐車可能台数は少ない。写真にあるゲートまでの誘導路は

片側1車線で道幅が狭く、ハンドル操作に注意する必要がある、入場・退場ゲートともに縁石をこすったり、乗り上げたりしている車を時々目にする。大型車は当然通行できないが、ワゴン車でもハンドル操作に慣れていないと、かなり難しい。問題はこのゲート右側に表示されている「ご利用できる車の大きさ」と書かれた看板の「高さ 2.1m 以下、長さ 5.0m 以下、幅 1.9m 以下」とする数値である。完全な青空駐車場なのになぜ高さ制限が必要なのか。この問題は2017年1月24日に行った日本語学概論（受講生 86名）でも扱ったが、気がついた学生はほとんどいなかった。なぜ青空駐車場に高さ制限が必要なのかについては、様々な解釈が可能であって正解はない。発見の喜びと考える力とが試される問題である。解釈の一例を挙げる。

- ・車両の大きさは、高さ、長さ、幅がある程度比例しているため誘導路を通過できる車両の大きさを示しているから
- ・看板の後ろに自動発券機（黄色の箱）が見えるが、高速道のような二段式の発券機ではないので、高さのある車両（＝運転台が高い車両）は駐車券を受け取れないから（二段式発券機を設置するには費用がかかる）
- ・この場所（あるいはその周辺）はいずれ青空駐車場から立体駐車場になる予定があり、高さ制限を事前に予告する必要があるから
- ・この看板自体を他の立体駐車場から剥がしてもってきたから

他にも解釈はあるかと思うが、とにかく不思議な看板であることは間違い無い。なお、最後の解釈は、ベトナムから交換留学で来ていた学生の解釈である。物資のリサイクルに関する意識が反映するとすれば、この留学生には日本の日常の言語表現がどう映っているのか、非常に興味深い。

（3）花嫁花婿募集

郡上市八幡町本町（歴史風致地区）の一角に掲げられた「花嫁花婿」募集の看板の写真を図4に示す（撮影日：2016年6月25日、撮影者：小助川貞次）。



図4 花嫁花婿募集



図5 設置場所

色彩を補足すれば、全体の背景は白、「花嫁」は赤色バックに白抜き文字、「花婿」は青色バックに白抜き文字、「募集」はピンク色バックに白抜き黒色影つき文字、「永遠の幸福…」「(再婚可)」は白抜き文字、「初めの一步～頑張りましょう」は青色文字、その下の「郡上結婚支援協会」は黄緑色文字、携帯番号は赤色文字、その他はすべて黒色文字。設置場所を図5に示す(個人医院の駐車場ブロック塀にスチールの骨組みを打ち付け、これにボルトで固定)。

どこにでもありそうな内容を記した募集看板であるが、ここから読み取れる内容と疑問は極めて多い。国語の問題として気がつく点を以下に列挙する。

- ・色彩と性別の関係(花嫁：赤色バック、花婿：青色バック)
- ・漢字字体(女・佳・くさかんむりが教科書体になっていない)
- ・助詞や活用語尾の表記(「の」「は」「な」「いと」「から」などが小書き)
- ・メッセージをどのように伝えるのか(コミュニケーションやプレゼン)

さらにこの看板の内容に関して言えば、いくつかの疑義が抱かれる。

- ・看板のデザインが派手すぎないか
- ・花嫁花婿募集のお目出度い内容なのに設置場所をよくみるとゴミステーション
- ・連絡先や組織は信用できるのか
- ・具体的にはどのような活動をしているのか
- ・「永遠の幸福は、素敵な出会いと結婚から。」であれば、結婚しないと幸福になれないのか?
- ・「あきらめないで」ということは「あきらめる」人が多いということなのか

このような疑義の一部については、直接代表者に問い合わせてみれば解決する事柄であるが、少なくともこの看板の範囲だけから読み取ろうとすれば、結婚生活についての知識や体験、郡上市という土地柄や地域性、募集広告に連絡や応募をした経験など、豊富な知識と経験値、高い判断力が問われる。一方で、読み取る内容について正解というものはない。

4. まとめ

本稿では、日常的な言語情報の事例を4つ示したが、入念に構成・推敲された近現代の小説や評論と等し並みに扱うことは勿論できない。前者には不自然、不完全、不適切な表現や内容が含まれている虞があるからである。しかし、そのようなノイズも含めて限られた情報源の中

から、様々なヒントを見つけ出し、自分の持っている知識や経験を総動員して、読み解こうとする活動の積み重ねこそ、国語に対する関心や、社会の仕組みに対する関心を呼び起こすことができるのではないかと思うのである。日常的な言語情報には、「自由な発想」と「自由な解釈」が保証されているからである。

注

- 1) 蓼沼正美 (2015) は、現代文学理論を分かりやすく解説しながら、このような国語における読解の窮屈さについて、具体例を挙げながら論じている。
- 2) 翌日にならないと続きが読めない新聞連載という媒体と、全ての回をランダムに読んでいける単行本という媒体の違いによって、どのようなことが問題になるのかという点については、小森陽一 (1985) など多くの先行研究があるのでここでは触れない。
- 3) 同書は国立国語研究所のコーパス・データベースで精密画像が公開されている (<http://dglb01.ninjal.ac.jp/kokonmojisan/>)。
- 4) JR 西日本の News Release (富山駅南口への時間貸駐車場設置について、平成 28 年 1 月 20 日) では「暫定的」な時間貸駐車場としている。駐車台数 150 台。

引用文献

- 小助川貞次(2006):メール文章にも注意しよう(『國文學(解釈と教材の研究)』第51巻第12号,122-129頁)
小森陽一(1985):解説『ころ』を生成する心臓(ちくま文庫『ころ』,301-325頁,筑摩書房)
蓼沼正美(2015):超入門!現代文学理論講座(ちくまプリマ-新書242,筑摩書房)

(附記)

本稿は富山大学人文学部の平成26年度専門科目「日本語学演習」「日本語学講読」「日本語学概論」の内容、及び富山大学で開講した平成25年度・平成27年度教員免許状更新講習「国語教科書の作品と原典との関係」、平成28年度教員免許状更新講習「原典を利用した国語教材の作成と応用」、平成29年度教員免許状更新講習「言語表現／非言語表現の諸相」の講習内容を踏まえたものである。

